



夢追い人

Another Dream

Another Summer

MeQue\_MeQue

## 第1話 夢

---

[BGM1:seaside insanity / art kill music\(youei kawazu\)](#)

白黒の夢を見る、一人の男

夢は嫌いだ。

だが人は眠らずには生きてはいけない。

「社会人になってから夢見なくなったよなー」酒の席、誰かが「昨日変な夢を見た」という話題を振るとみんな、自分が見た変な夢の話題で盛り上がり始める。

子供の頃見た夢は、大体が荒唐無稽で支離滅裂でファンタジーに溢れていた。思春期になると気になるクラスメイトや憧れのアイドルの夢に胸をときめかせ、時には失恋し、時にはセックスをした。

社会人になってから10年。いまや仕事の夢しかみない。それはありふれた日常をなぞるだけで、多少のifや多少のキャストイングミスはある。翌朝目覚めたときには覚えていても、次の日には……いや玄関を開けて家を出る頃には忘れてしまっている。

夢は嫌いだ。

私の夢には色がない。

大人になるまでそれは全く当たり前のことだと思っていた。ところがある日、友人が『昔付き合っていた女の夢を見た』という話で盛り上がった。そのとき初めて自分の見ている夢と、友人の見ている夢の決定的な違い。自分の夢には色がない事がわかった。

調べてみるとそれは特別なことではないらしい。いろいろな説が言われているが、実際には解明されていない人体の謎。人間の脳の謎だ。

しかし、そんなことはどうでもよかった。

私は私の人生そのものの彩のなさが、自分の見る夢にも現れているような、そんな惨めな感覚に襲われた。それはあの時から――友人の毒のない、そして無邪気な悪意「白黒の夢なんて北村らしいや」の一言が頭から離れない。

そうなのだ。私らしいのだ。だから――

夢は嫌いだ。

夢は、嫌いだ。

夢なんか……

色つきの夢を見る、一人の女

夢はきれいよ。大嫌い。

朝目覚めたとき、夕べみた夢を覚えている時は体がだるい。

「素敵な彼とか夢に出てこないかなあ、夢の中だけでもいいから燃え上がるような恋がしたい！」

そんなことを夢見ていた少女時代はワタシにもあった。高校を卒業し、反対する親を押し切って東京の大学に通い、バイトとミーハーサークルと合コンに明け暮れた青春時代。夢という夢は、それは全て少女漫画の中だけだということを知らされた。

それでもワタシは、夢を求めて、子供の頃から好きだった絵の仕事。CGの製作会社に就職することができた。でもそれこそ仕事というのは一つ一つの夢や憧れを壊してゆく作業に他ならなかった。

「なあタ子、オレさあ、音楽が好きだからこそ、やっぱ、音楽を仕事にはできないわ」

学生の頃付き合っていた彼氏は、デモテープを作っているいろんなレコード会社に送り続けていたけど、ある日、ワタシにそう継げて、髪をばっさり切り、就職活動を始めた。

夢はきれいよ。大嫌い。

夢なんか持つから裏切られる。夢なんか見るからだまされる。

「南里くん、またクライアントからクレームあがっているんだけど、どうなってる？」

毎日上司に絞られ、クライアントに怒鳴られ、辛い思いをすればするほど、わたしの見る夢は現実逃避してゆく。色鮮やかな夢の中で、みんなワタシを褒めてくれるのに、どうして現実ではうまくいかないの。だったら夢なんか見なければいい。

夢はきれいよ。大嫌い。

夢はきれい。

夢なんか……

『見なければいいのに』





## 第2話 白黒の夢

---

小さな会社と、最初は思っていた。大学を卒業して、無事に就職先が決まったことに、別に誰も褒めてくれたわけでもなかったが、「誠二も社会人になったか」と親戚から声をかけられれば、それはそれでうれしかった。だけど仕事の内容を聞かれると、それはそれで面倒だった。四十、五十の叔父や叔母にコンピュータ関係の仕事と言えば、「コンピュータを売っているのかい？」と聞かれ、「いや、売ったりはしないんだ。コンピュータで使うソフトを作っているんだよ」と説明すると「あらまあ、偉い難しい仕事ねー」とたいそうなことをしているような目でこちらを見る。「いやいや、僕がやっているのはその中で会社の経理とか、総務とか、そういうことだよ」と付け加えると「あー、事務仕事ね」とややトーンが下がる。なんとも気分が悪いが、誤解されたままだとそれで親戚中に広まってしまう。煩わしい。

入社して10年、小さかった会社は時流に乗っていくつかのヒット商品を世に送り出した。従業員10人程度の会社が、3回の引越しを経て、今では50人規模の会社に成長した。一人でこなしていた業務も3人の部下を持つ一つの部となり、32歳で『北村部長』と呼ばれることに最初は抵抗があったが、今ではすっかり慣れてしまった。昼間働き、夜は気の合う仲間と繁華街を飲み歩き、一人身の自由な時間を無駄に浪費するばかりの毎日を繰り返す。これといって変化のない生活に少しだけ不安を感じていた。「このまま、ずっと歳をとっていくのだろうか？」

自然、家で飲む酒の量も少しずつ増えてきた。このままアル中にでもなるか、その前に肝臓を悪くするのか。まったく、なんともさえない人生だ。まるで俺の見る夢のようだ。

そう、私の夢には色がない。モノクロの夢。まるで自分の人生そのもの。

ところがある日を堺に……具体的な日付は覚えていないが、私の生活にある変化が起きた。『生活』と言ってもいわゆる実生活の変化ではない。私の内側で起きた変化。私の人生の象徴のようなモノクロの夢——その夢に色が着いたのである。ある特定のシチュエーションの夢——それは悪夢とっていいもの、いや悪夢そのものだった。

悪夢——それはつまり、うなされるような酷い夢、怖い夢、悲しい夢、辛い夢、苦しい夢。人間30年も生きていれば悪夢の一つや二つ、いや、多分あらゆる感情の夢を見るのであろう。怖いものに追いかけられ、最後には死を覚悟するような夢というのは、どこにでもある話であり、「それはきっと何かの予兆だよ」とか言われるような特別なものではないだろう。夢に関する心理学には全く関心がないが、脳の仕組みとして記憶の整理が夢の役目であり、或いは潜在意識が夢に現れるという話も理解できる。だが私の見る夢とは——殺人。誰かが人を殺すところを目撃する夢、いや、「誰か」ではない、「私が」なのである。

いったいどうしてこんな夢をみるんだ。俺、誰か、殺したい奴とかいるのかよ

なんとも目覚めの悪い夢だった。そしてすぐに気がついた。

そういえば、あれは赤い血……色が着いている。一体俺は誰を殺したんだ？思い出せない。でも多分あれは……女？

思い出そうとしてもあまり具体的なディテールがはっきりしない。自分自身の感情の起伏が激しく揺さぶられ、異様な興奮状態で目が覚めている。殺したいほど憎い人間を自らの手で殺めるとき、人はこんな状態になるのだろうか？

わからない

「まいったな。全然思い出せないのに、何なんだろう。この嫌な感じ……吐きそうだ」

北村誠二は自分の身に起きていることの重大さにまだ、全く気付いていなかった。そう、覚えてはいないが、ある日を堺に、北村誠二の白と黒の世界に異変が起きていたのだった。

### 第3話 色つきの夢

---

絵を描くのが好きだった。内気なワタシは、本や漫画を読むのが好きだった。自分にはとてもできないようなことをやってのける、闊達な主人公が活躍するような物語を好んで読んでいた。ワタシは妹のようにはなれない。中流家庭に生まれ育ったワタシたち姉妹。だけど性格はぜんぜん違う。でも、それだけじゃない。ワタシは望まれて生まれてきたわけではない。そもそもそこが、妹とは違う。

できちゃった結婚。ありがちな話だが、実際にそんなことを親戚から遠まわしに聞かされると、正直こたえた。なれない子育てに苦しんだ母は、ちょっとした育児ノイローゼになっていたのだと、伯母から効かされていた。「だから、最初は大変だったんだから。初めてだから、まあ、仕方がないし、できちゃった結婚だったからねえ。結局お父さんとお母さん、新婚旅行にはいけなかったのよ」

そんなことを聞かされても、ワタシにはどうすることもできない。ワタシはただただ、両親に感謝し、そして申し訳なく思うしかなかった。『ワタシのせいなんだ』なにか、うまく行かないことがあると、ワタシはまず、自分の何がいけなかったのかを考える。何がよかったかなんて、考えたことはない。『ワタシが見る世界と、妹が見る世界は別のものに違いない』そう思うに足りる過去の出来事なら、今から10や20はすぐにあげられる。たとえば――そうなのだ。だからワタシはダメなんだ。

いい思い出が何もなかった高校を卒業し、横浜の短大に進学した。東京の親元を離れ、横浜での生活。ワタシの人生は180度変わった。テニスやスキーを楽しむサークルに入り、合コンで知り合った男の子と馬鹿騒ぎをして、羽目をはずして――それでワタシは、女になった。友達の誘いでいったライブハウス。ボーカルの子もかっこよかったけど、一心不乱にベースを弾く彼に恋をして、そして付き合った。彼にはワタシなんかにはない、大きな夢、実現可能な夢があった。ワタシは彼が夢に向かって走っていく姿を見るのが好きだった。

でも、幸せな時間はあっという間に過ぎ去ってしまう。就職活動の時期になると、それまで一緒に遊んでいた女友達はしっかりスーツを決めて、まるで「ワタシ、まじめな女子大生です。遊びなんか知りません」と顔に化粧で書いてしおらしさとしたたかさを武器に大手の企業へと訪問していった。ワタシは――ワタシはそこまで器用になれなかった。ワタシも彼みたいに、好きなことを見つけてそれを仕事にするんだ。

絵を描くのは好きだったし、それなりに勉強もした。当時インターネットが急速に普及して、WEBデザイナーという職業が求人広告に目立つようになり始めていた。だからワタシは、彼が夢を追いかけて実現しようとしているように、ワタシもそうなりたかった――もう、あの頃のワタシじゃない。

でも、どこかで何かが狂ってしまった。一度かみ合わなくなった歯車は、二度と戻りはしなかった。

『やっぱり ワタシが いけないんだ』

夢なんか、夢なんか見るから辛くなる。現実が色あせた人生に戻ってしまうと、ワタシの見る夢ときたら、まるで少女時代に逆戻り。現実が辛ければ辛いほど、夢の中のワタシの人生は色あめでやかになっていく。典型的な現実逃避だということは誰の目から見ても明らか。

ところがある日を堺に……具体的な日付は覚えてないけど、ワタシの夢にある変化が起きた。夢の中まで色を失ってしまった。ワタシの唯一の逃げ場だった色鮮やかな夢——その夢に色が消えてしまった。しかもそれは、とてもとても恐ろしいシチュエーションの夢——それは悪夢といっているもの、いや悪夢そのものだった。

悪夢——それはつまり、うなされるような酷い夢、怖い夢、悲しい夢、辛い夢、苦しい夢。ワタシの短い25年の人生で悪夢なんて数えるほどしか見たことないのに。誰かに追われている。ワタシは命の危険を感じて必死で逃げている。助けを呼んでも誰もきてくれない。ここは……どこ？暗くてよくわからない。ワタシ、いったいここで何をしていたの？全く見覚えのない場所。そしてなんともいえない違和感。何かがおかしい。でも、早く逃げないと、早く逃げないと——『殺される』

でもダメ。とうとうワタシはワタシを殺そうとしている誰かに追い詰められ、死を覚悟する。そして次の瞬間——誰かがワタシを殺すところをワタシは別の場所から眺めている。いや、「ワタシ」ではない、「誰か？」に変わっているような不思議な感覚。

いったいどうしてこんな夢をみるのよ。ワタシ、誰かに殺されるようなそんなこと身に覚えがないのに。

なんとも目覚めの悪い夢。そしてすぐに気がついた。

そういえば、あれはただ暗いのではない……色が消えている。一体どんな場所なのか？どんな人がワタシを殺そうとしているのか、思い出せない。でも多分あれは……男の人？

思い出そうとしてもあまり具体的なディテールがはっきりしない。自分自身の感情の起伏が激しく揺さぶられ、異様な興奮状態で目が覚めている。誰かに殺されると死を覚悟したとき、人はこんな状態になるというの？

わからない



「いったいなんなの。全然思い出せないのに、何なんだろう。嫌だわ。この感じ……吐きそう」

南里夕子は自分の身に起きていることの重大さにまだ、全く気付いていなかった。そう、覚えてはいるが、ある日を堺に、南里夕子の夢の世界に異変が起きていた。



art kill music

## 第4話 色つきのデジャブ

---

「そういえば最近、夢に色が着いているな」

私は洗面所で歯を磨きながら、昨夜見た夢のことを思い出そうとしていた。

「うえ〜」

思わず戻しそうになる。タバコをやめてからというもの、朝の歯磨きのときにえづくことはほとんどなかった。一瞬トイレに駆け込もうと思ったが、どうにか我慢することができた。

「畜生、一体なんなんだ、これ！」

苛立ちを隠せない。だが、具体的に夢の内容を思い出すことはできない。それはまるで北村の脳が夢の記憶を思い出すこと拒絶して横隔膜の痙攣――しゃっくりをしているような妙な感覚だった。

だが、思い出すことをやめようとしても、それは自分の頭の中に映像の記録として確かに残っていて、無秩序にそのファイルは再生されるのである。確実にわかること、それは今までの夢とは違って色が着いていること、しかもそれは色鮮やかな女性の衣服、赤や青の車の陰、明かりといった断片的な短い映像であり、音は水中にもぐっているときに聞こえるような、どんよりとくぐもったものだったが、時々はっきりとした音が頭の中を駆け巡る。

「あの悲鳴は女のものだよなあ？」

夢の映像が断片的に頭の中に流れるたびに、私は身震いをし、鼓動が高まった。

「恐れているのか、興奮しているのか、なんでもいい、すごく嫌な感じだ」

気がつけばいつもの時間よりも5分程度が遅れている。

「畜生、まったく、どうなっているんだ。ふん、なんか悪いものでも喰ったかな」

私は自分に向けて精一杯の皮肉を言って自らを奮い立たせた。別に今日、仕事を休んでもどうということはないが、休んだからといって今の症状がよくなるとも思えなかった。いや、むしろ寝る事が怖かった。眠り、そして夢を見る事が……

私は自らの神経のチャンネルをできる限りオフにするように心がけ、目に映るもの、耳に聞こえてくるものをできる限り無視をして、記憶のそこから悪夢の映像を引っ張り出すような連想を避けるように心がけた。が、その行為は見事に失敗をした。

玄関を開けると、夢に関連する風景が次から次へと目に飛び込んできた。

「あれはやはり、この近所の夢なのか……」

北村誠二は、夢の続きとも現実とも区別のつかない世界に脚を踏み入れてしまった。

## 第5話 モノクロのデジャブ

---

「そういえば最近、夢に色が着いてないみたい」

私は化粧をしながら、昨夜見た夢のことを思い出そうとしていた。

「少し肌が荒れてきたかしら」

鏡の中の自分を見つめる。タバコを吸い始めてからというもの、体重は少し落ちたが肌の質感が変わった気がする。それとも単に年齢の問題なのか、ストレスなのか.....

「まいったなあ。ボロボロじゃない」

苛立ちを隠せない。だけど、今更何をどうかえようとも良い変化が望めるとは思えなかった。

「出世を諦めたサラリーマンと結婚を諦めたOL、どっちが不幸なのだろう？」

どっちが幸せなのだろう？ と考えられないところが、自分の悪いところだとわかっているけど、帰ることなんかできない——どうせ私が悪いのだから。

だが、考えるのをやめようと思っても、それは自分の頭の中に鮮明な記憶として確かに残っており、無秩序にその記憶は再生される。確実にわかること、それは今まで何度も変えようと思ったけど、最後には同じ場所に戻ってしまう。せめて夢の中だけは色鮮やかな人生を送りたいと思っていたのに、それすらもままならなくなっている。しかも見る夢の内容までマンネリ化しているような気が.....ふと、一つの疑問が頭をよぎる。

「あれは誰の悲鳴？」

昨日見た夢の断片から一つのシナリオを構成してみたとき、ワタシは一つの疑問にぶち当たった。

「襲われていたのはワタシなのに、最後の悲鳴はワタシじゃなかったような.....じゃあ、いったいあの悲鳴は誰のものなのかしら？」

気がつけばいつもの時間よりも5分程度が遅れている。

「いっけない。もうこんな時間だわ。夢なんてもう、どうでもいいわ」

ワタシはことさら自分のことには興味がなかった。しかも色彩が失われた自分の夢のことなど、考えたくもなかった。いや、むしろ自分のことを知れば知るほど自分がイヤになる。それが怖くてたまらなかった。だからきっと、あんな夢を見るに違いない。誰かに襲われて殺されそうになるなんて.....

ワタシはできるだけ自分のことについて考えるのをやめようと思いがけ、目に映るもの、耳に聞こえてくるものをできる限り意識して、ほかの事を考えようと思った。が、しかし、その行為は見事に失敗をした。

玄関を開けると、夢に関連する風景が次から次へと目に飛び込んできた。

「あれってやっぱり、この近所の夢なのか……」

南里夕子は、夢の続きとも現実とも区別のつかない世界に足を踏み入れてしまった。





## 第6話 出口

---

北村誠二は家を出た。

家から駅までは歩いて10分。自転車を使っていたこともあったが、少しばかり体重が増えてきたことを気にしだした頃に、「ちょうど」と言っていたのかどうか、或いはやはり、単なる偶然、そして確率論の問題なのか、5年間乗り続けていた自転車が盗まれてしまった。盗難届けを出す気にもなれない。うっかりカギをかけ忘れたのは自分なのだから。

「この街でカギをかけずに自転車を止めるって言うのは、どうぞ盗んでくださいってしているようなものだ！」

自分の住んでいる街を説明するのに何度かそんな表現をした事がある。別に表に見えて治安が悪い街だとは思わない。人が多いのだ。ピッキングや車上荒らしの件数は近隣の地域ではトップである。不名誉な記録ではあるが物騒な事件――傷害事件や暴行事件などはあまり耳にしない。耳にしないだけで、ないということはないだろうが、テレビのニュースに取り上げられるようなことは、少なくともここ数年はなかったように思える。

自転車と徒歩でそれほど移動時間が変わるわけではない。しかし、劇的に変わる事がある。それは風景である。自転車に乗って走る街中と自分の足で歩いて見える街中では、目線の高さ、細い路地の小さな闇、街の雑踏が全く違うものになる。

「へえ、こんなところにこんなお店があったんだ」

自転車で通勤していたときには気付かなかった飲食店、或いは狭い路地にひっそりと暮らす野良猫たち、コンビニの前でたむろをしている少女たちの笑い声、路地の植え込みに力強く咲いているタンポポの花。少し目線が変わるだけで、街の風景はがらりと変わった。

だが、それはいい。今は問題じゃない。いや、大きな問題だ。

もしも自分が未だに自転車を使っていたら、こんなに苦しまずにすんだのかもしれない。夢の記憶名断片は、街中のいたるところに無作為に放置され、数メートル歩くたびにまるで衝撃のように私の頭を襲う。気が狂いそうだ。

「デジャブというのはもう少しぼんやりとしたものだろう」

私は勝手にそう決め付けた。そうするしかなかったし、それはどうでもよかった。ただ問題は、記憶とともに襲ってくる衝撃、いや衝動、いや何だかわからない気持ちの高ぶり、そして嗚咽。

「くそう！なんなのだ！まったく」

私は仕方なしに走り出した。駅まではあと100メートル、いや200メートルか。ともかく一目散に駅へと走り、やっとの思いで駅のホームにたどり着いた。安全地帯……やっ和一息ついた。いつもどおりの風景。大丈夫。もう大丈夫だ。

私はまだ時々襲ってくる嗚咽をどうにかこらえながら、朝のラッシュの中で少しずつ、本来の自分を取り戻していった。

「この息苦しい世界こそ、俺にとっての安息の場所なのかよ」

思いつきの皮肉を追い詰められた精神状態の中から紡ぎ出す。大丈夫、もう大丈夫だ。いまなら、そう、冷静に考えられる。やればできるじゃないか。そうだと、俺は冷静さ、夢ごときに日常を脅かされて、まったく情けない。情けないが……

私は気がついた。言い知れぬほどの高揚感の後の余韻がある。なぜかはわからないが自分の中には確かにそれはある。いったい何をなしえたのかはわからないが妙な達成感がフツフツと沸いてくるのがわかった。まるでそれは悪夢というプールの中を潜水で泳ぎきったかのような達成感であり、一人でいると自我が確認できずに崩壊していく様を、ぎりぎりのところで持ちこたえたような狂気からの回避――しかしそれは生きている限り、決して逃れることのできない定めでもあり、タイトロープのほんの一瞬の休憩場所にたどり着いただけに過ぎない。

満員電車が、なんら普段と変わらぬ日常への入り口、或いは悪夢からの脱出口であると北村誠二が思うようになるのは、それから数日経ってからのことである。

## 第7話 逃げ道

---

南里夕子は家を出た。

家から駅までは歩いて10分。自転車は持っているけど通勤にはめったに使わない。スーツやコートを着て自転車に乗るのは好きじゃない。それに、ワタシ、あまり自転車の運転は得意じゃない。

子供の頃から運動は得意じゃなかった。自転車が乗れるようになったのも小学校を卒業した春休みのことだったし、25メートルを泳げたのは、試験のときくらいしか記憶にない。運動会では決まってビリか、その次だった。

「危ない、そっちはダメって思うとそっちにいつちゃうのよねえー」

合コンに誘われて、言っただけで見たものの、そんな風に可愛く自分を表現することはできなかった。ワタシにとって、できないこと、苦手なことはすなわち『隠したいこと』であり、弱さを武器になどという発想は全くなかった。正直、嫉妬した。

「ワタシ、なににもできないから……」

自分をアピールすることは苦手だったし、人に注目されるのもイヤだった。好きなアイドルがいても誰かと一緒にその話題で盛り上がることはできなかった。だってワタシの中のイメージを壊されたくない。犯されたくない。

ワタシはいつでも自分の逃げ道を作って、そしてそこに隠れて怯えながら生きてきた。それは今でも変わらない。世の中との心の摩擦は妄想という逃げ道によって、どうにかここまで生きてきた。でもそれも限界なのかもしれない。

なんでもない駅までも道のりが、妙にグニャグニャした風景に見える。夢と現実の区別がつかなくなっている。

「もう、こんな風になってしまって、ワタシったら、もうダメね」

でも、それはいい。今は問題じゃない。いや、大きな問題ね。

もしも自分がまともなら、きっとこんなに冷静じゃいられないはずよ。こうして一人で歩いていると勝手に妄想のスイッチが入るようになってしまったのかしら？いや、だから、もともじゃない、いや、まともなの、まともなフリをしているの、わからない気が狂いそうだわ、ちがう、最初から狂っているの。

「デジャブというのはもう少しぼんやりとしたもののはずだわ」

ワタシは勝手にそう決め付けるしかなかった。そうするしかなかったし、それはどうでもよかった。夢の中の記憶と、今こうして歩いている街並みが同じだからといって、それだけではデジャブとはいえない。風景と体験、行動が一致しなければそれは何の変哲もない日常的な夢。そんなことをいちいち気にしてはいられない。でもどこかおかしいと感じている。いや、そのこと事態が、今この瞬間がデジャブ？

「イヤねえ！どうしちゃったのかしら！ワタシったら」

ワタシは仕方なしに走りだした。駅まではあと100メートル、いや200メートルか。ともかく一目散に駅へと走り、やっとの思いで駅のホームにたどり着いた。現実逃避……ちがう、妄想からの逃避。やっとたどり着いた。いつもどおりの現実。大丈夫。もう大丈夫よ。

ワタシはまだ心に引っかかっている違和感を置き去りにして、朝のラッシュの中で少しずつ、本来の自分を取り戻していった。

「この息苦しい世界こそ、ワタシにとっての現実の世界なのよ」

気持ちよく朝を迎えたことなんて、思い出せないくらい昔の話。大丈夫、でも大丈夫。今までうまくやってきたじゃない。やればできる子。そうよ、ワタシったら本当は……危うくまた妄想の世界に入りそうになったが、加齢臭、通勤列車の独特のオヤジ臭に我を取り戻した。まったく情けない。情けないが……

南里は気がついた。言い知れぬほどの違和感。なぜかはわからないが自分の中には確かにそれはある。いったい何が気になっているのかはわからないが妙なざらつきがワタシの肌にまとわりついている。まるでそれは着慣れない服を着たときのような、そう、他人の下着を身につけたような悪寒のする感覚であり、皮膚の何層か下のところでおきている痒み——まるで小さな虫が身体の中を這い回るような狂気。

今までは妄想こそがワタシの灰色の人生、つまらない現実からの逃げ道だったのに、その妄想が現実に犯されそうになっている。そんな気がしてならない。

窓から見える景色はなんら昨日と変わらないはずなのに、ワタシの目にはどこか違って見えた。

「いったい誰がこんなことしたの？街中のビルが灰色に塗りつぶされているわ」

夢の中も現実の中も何里の世界は色あせていった。だが、南里夕子はそのことに恐怖するのはそれから数日経ってからのことであった。







[BGM2:seaside pianissimo / art kill music\(youei kazazu\)](#)

「どうしたの？最近元気じゃない？」

同僚のミサコはいつもわたしのことを気遣ってくれる。でもそれが鬱陶しく思えるようになったのは、ここ最近のことだ。

「ちょっと、寝不足って言うか、寝てはいるんだけどね。眠りが浅いというか……」

「なんか悩み事でもあるの？睡眠がちゃんと取れないと御肌にすぐ出る年頃よ。わたしなんか、すぐに肌があれちゃうわ。この前も部長に叱られて……」

うるさい、うるさい、結局他人を心配するフリをして自分の愚痴を言いたいだけじゃない。そんなだったら誰か他の人にやってよね。わたしは、わたしは、そんなに起用じゃないの、自分のことだけで精一杯なの、ううん、ミサコはそんなことわかっている、わかっているワザとやっているんだわ。きっと……きっとそうに違いないもの。だってミサコはわたしなんかよりもずっと気が利くし、何でもできる子なのに、わたしなんかにも声をかけて、きっとそれで自分は気が利く優しい子だって、みんなにアピールしているのよ。きっとそう……きっとそうなんだから。

「……だからさあ、夕子もあんまり思いつめないほうがいいよ、ねえ？」

「うん、ありがとう。そうする。いつも気を使わせちゃって、ごめんねミサコ」

ミサコは『気にしないで』と満面の笑みを浮かべて、わたしのデスクから離れて行った。なんて可愛らしいんだろう。わたしもあんな風になれたらいいのに、なれたら……なりたいたいのかしら。わたし？

そういえば聞いたことがある。夢というのは潜在意識、無意識の欲求のはけ口だと。確かフロイトだっただろうか？ 学校の授業でそんな名前を聞いた事がある。夢判断とか、夢診断とかそんな書籍だったけ？ ちょっと読んでみようかな。今見ている変な夢って、何か意味があるのか調べてみよう。

しかし、どんな夢だったかを思い出そうとしても、単に夢だからというのではなく、妙にディテールがはっきりしない。いや、しなくなってきたことにワタシは違和感を覚え始めた。

「おかしいわね。今朝出てくるときには、もう少し具体的というか、実体験のようなリアルさがあった気がしたけど、今は全然思い出せないわ。夢って、そういうものだったかしら……」

一度湧き上がった疑問は、いつまでもワタシの脳裏に焼きついて離れない。夢に関する自分の持っている知識を頭の中の書庫の中からいろいろと引っ張り出す。

「確かフロイトは無意識こそが意識をコントロールしているとか、そんなこと言っていたんだっけ？ 多重人格とかそういうのもフロイトだったっけ？ う～ん、なんか違うわねえ。夢判断？ 夢占い？ 昔、何だったかそんな記事を雑誌の特集で読んだような.....う～ん、ダメだなあ、すっかり忘れちゃっているわ」

そんなことを頭の中で考えながらも、ワタシの手は止まることなく目の前の作業を進めていく。PCの画面には黒と白を基調としたシックなWEBページとタグでびっしりと埋められた画面が交互に表示されている。好きで始めたデザインの仕事だが、今はただ、食べるためだけにやっている。数年前までは色鮮やかな世界だったが、最近はあまり派手な色使いのホームページは流行らなくなった。みな同じようなデザイン。飽き飽きだ。

時々ワタシの琴線にふれるような仕事の依頼も会社には来るが、そういうものは、たいてい別のチームが取って行ってしまふ。自分に回ってくることはほとんどない。みんなわかっているんだ。本当はもっと色鮮やかなサイトをたくさん作りたいのに。だけどそれは今の流行ではない。クライアントの依頼は絶対だ。だからたまに自分が好きにやれそうな案件があると、力のあつるチームがみんな持って行ってしまふ。ワタシも本当はそれをやりたい。だけど、そんなこといえない。いえるはずがないもの。だってワタシは.....

現実と妄想の狭間で、時間だけは過ぎていく。みな同じに過ぎていく。時にそれは重なり合い、また別れて、螺旋のように絡まっている。螺旋のようにぐるぐると、ぐるぐると.....

## 第9話 モノクロのストレス

---

ワタシは、はっきりと自分のストレスを認識していた。そしてそれはつまり、ワタシ自信の欲求がどういうものなのかを認識しているということになる。

もっと、色鮮やかなデザインをしたい

世の中がモノトーンに染まっていく様を、じっと眺めていることなどできなかった。ある時期、そういった風潮に反発してあえてカラフルなデザイン案を何点も提案した事がある。それはことごとく却下された。センスがない。古い。仕事にならない。散々なことを言われた。傷ついた。思いっきり傷ついた。わかってはいたけど、わかってはいたけど、あんな言い方しなくてもいいのに。

ミサコが慰めてくれた。慰めてくれればくれるほど惨めになる。出口がない。時々ワタシは何をやっているのだろうという疑問で全ての思考が停止する事がある。これはもはや病気とっていいだろう、そう思ったとき、悩むこと、考えることをやめるべきだと思った。そしてそれは見事に成功したのだった。したはずだった。

最近は何も言われなくなった。言われたとおり、期待されたとおりに仕事をこなしている。

「なんだ。やればできるじゃないか」

最初はそんなことを言われたけど、今では何も言われなくなった。ミサコも声をかけてくれない。邪魔になら内容に、目立たないようにしていれば全てうまくいく。ストレスも感じなくなった。

でも、ストレスもないけど、同時に喜びもなくなっていた。

どんなに非難されようが、自分の思ったとおりの作品を作った時の喜びは、何物にも変えがたい充実感がある。かといって自己満足の作品を作ったところでそれはマスターベーションでしかない。出来上がった作品の素晴らしさをみんなで共有できてこそ喜びがある。

「南里君、南里君？おい、南里」

「あっ、はい」

不意に部長の声が遠くのデスクから聞こえてきた。いいえ、遠くなんかじゃないわね。

「すみません、ちょっと考え事していて……」

「ああ、いいんだ。クライアントからOKがでたよ。あの内容でいいそうだ」

「あ、そうですか、わかりました。ワタシはC案の方がお薦めだったんですが……」

そう言い掛けて、言葉を止めた。もう、誰も聞いてはいなかった。

ワタシはそのままトイレに駆け込む。こらえきれないような嗚咽がこみ上げてきた。ぎりぎりのところで間に合った。わかっている。精神は誤魔化せても身体は誤魔化せない。お昼に食べたサラダの残骸が、トイレの渦に吸い込まれていくのを眺めながら、一つ大きくため息をついた。

用を済ませ、洗面台で顔を洗う。ぼんやりと鏡に映る自分の姿がなんとも不健康で汚らわしく思えた。不意に昔の童話を思い出す。

「鏡よ、鏡、世界中で一番醜いのは誰？」

鏡の中のワタシは沈黙を続ける。

「じゃあ、これはどう？世界で一番優秀なデザイナーは誰？」

鏡の中のワタシはにやにやといやらしい笑みを浮かべながら、沈黙によってこたえる。

そ・れ・は・あなた……ではないことは確かです

ワタシは濡れたハンカチを思いっきり鏡に投げつけた。ハンカチは見事に鏡の中のニヤニヤしたワタシに命中し、下品な笑い顔をやめさせることに成功した。鏡の中のワタシの頬に涙が滴れていた。

帰り際に不意にミサコから声をかけられる。

「ねえ、夕子。今日このあと時間取れない？」

ワタシの夕方のスケジュールは毎週びっしり埋まっている「帰宅」という文字で。

「別に、あとは帰るだけだけど……」

「よかったら、たまにはご飯でも一緒に食べに行かない？ ほら、ここ」

そうやってミサコがカバンから取り出したのは一枚のチラシだった。

『多国籍料理店 D i s c o coloratus 本日オープン』

「ほら、あのーいまいちとかイケてないイタリアンレストランあったでしょう？ あそこが改装して新しくお店ができたみたいなの。一応どんな店かチェックしておかないとね」

全く気が向かなかったが、でも、だからこそ、わたしは行くことに決めた。少し気分を……鬱に落ちていくようなスパイラルを止めたいと思った。

「うん、いいよ。すぐ支度するから、5分だけ……10分だけ待つて」

ミサコはうれしそうにしていた。何がそんなにうれしいのか？ どうせワタシには会社帰りの予定なんてないことは御見通しだったくせに、本当にかわいい顔して抜け目がない。あー、なんで自分はこんなふうに考えてしまうのだろうか？ ワタシ、根が暗いのね。でも、ミサコみたいにはなれないし、なりたいとも思わないんだから……思わないんだから！

思ってなんか、いない。

ワタシは支度をするのに5分、心の準備をするのに3分かけて、ミサコと合流した。いつも帰るときに使う地下鉄の駅の出口を少し過ぎていったところにその店はあった。店の前では背のすらっとしたシックな白と黒で決めたイケメンがチラシを配っていた。

「D i s c o coloratus (色鮮やかな料理) だけど店員はモノクロなのね」

ワタシがそう思う前にミサコが口にした。ミサコも店の名前の意味を調べていたらしい。本当に、抜け目のない子だ。

店内の明かりはやや薄暗く、テーブルや椅子はその照明のおかげで派手な色もシックにまとまって見える。間接照明の使い方がこなれているといった印象だが、ワタシは好きではなかった。

「へえ～、これって前からここで使っていたテーブルと椅子だけど、照明をかえるだけでけっこう雰囲気が変わるのねえ。さて、料理のほうはどうかなあ」

ミサコはまるで週末の朝の情報番組でグルメ取材をする女性タレントのようだった。むしろミサコのほうがこなれているかも知れないと思うほどだ。

「とりあえずは、ビールにする？ ほら、ビールもいろいろあるよ。『SINGHA』ってシンって言うんだっけ？ ワタシはこれにしようかな」

そういえばミサコは何度かタイに旅行に行っているって言っていたかな。

「ワタシも同じものでいいよ」

いつもと同じ。そう、ワタシはなんでも飲める。でもあまり酔ったことはない。無駄にアルコールに強いから、楽しい気分にもならないし、やけになったりもしない。まして楽しいフリも、泣きまねもできない——つまらない女。

「かんぱーい！」

何に乾杯するのはわからないけど、そんなことはどうだっていい。ワタシはすでに帰りたくなっていた。この場所は、好きじゃない。どんな色彩もすべてモノトーンに溶け込んでしまうようなこの空間には……

「おいしいねえ。日本のビールはこう、のどに痛い感じがしてさあ。男の人はあの喉越しってやつがいいみたいだけどね」

あれ？ おかしい。確かに喉越しのまろやかな感覚はワタシの喉にも心地よい。だけど、口に入れたときの舌触りに何か違和感を覚える。お通しとして出されたもやしを何かのソースを絡めた物を口にしても、繊維質が口の中で裁断されていく感覚はあるけど、そのほかは……ない、あるべきものがない。いや、もしかしたら最初からない？ ミサコはなにも言わずにお通しをつまみながらメニューを眺めている。味わう様子もなく、しかし不味いものを食べたときの表情でもない。

「ねえ、どれにする。いろいろあるわよ」

「ミサコは何か食べたいものあるの？」

「うん、ワタシはこれっと、これっと、それから、あー、このサラダもおいしそうじゃない」

「うん、じゃあ、それにあと、この中華風のピリ辛前菜を頼まない？」

「あ、それもおいしそうね。じゃ、店員さん呼ぶね。さてどんなイケメンがくるかな？」

ワタシにはどうでもよかった。イケメンもおしゃれな店の佇まいも。それより何より、少しでも色鮮やかな世界を堪能したい。そして、ワタシに起きていることを確認しなければ。もしかしたらワタシ、色だけじゃなくて、他のものも失ってしまったのかもしれない。味覚という感覚を……





## 第11話 奪われた感覚

---

「バーニャカウダでございます。こちらのお野菜はすべて当店が直接契約しております農家からのもので農薬や化学肥料を使わない有機栽培でございます」

そのときは思い出せなかったけど、最初に料理を運んできた店員は、俳優の誰かに似ていたし、そうでなくとも感じのいい男だった。ミサコの表情からもそれは見て取れた。料理じゃなくて、そっちのほうが目撃？

「へ〜。すご〜い。美味しそうですね」最高の笑顔でミサコが店員の気を引けば、「当店の自慢は最高の野菜を使うことですから」と店員も最高の作り笑いをする。反吐が出そうだが、確かに料理は美味しそう。色とりどりの野菜が白い大きな皿にキレイに並べられている。トマト、ニンジン、パプリカ、アスパラといった色合い豊かな野菜が、たぶん、赤、オレンジ、黄色、緑がバランスよく並べられている。多分……そう、多分。ワタシには、白と黒のコントラストにしか見えない。いえ、ちがうの。きっと色は見えている。目の問題じゃない。感覚の問題じゃないんだわ。

「ねえ、早く食べましょうよ」

店員がこちらのテーブルを離れると、ミサコはまるでオママゴトに興じる女の子のようにワタシに催促をした。迷惑だ、うっとうしい。ワタシは今、それどころじゃないのに。

「う、うん。す、すごくキレイな色合いね」

「そうね。トマトの赤が本当に瑞々しい感じがするし、ニンジンも本当にキレイなオレンジ色をしているわ。きっと、このアスパラも美味しいわよ。あっ、夕子はアスパラ苦手だったっけ？」

「ちがうの、アスパラは平気よ、苦手なのはセロリ……」所詮その程度にしか、ワタシのこと思っていないのね。ミサコ……

ミサコは半分にスライスしてあるミニトマトを口に運ぶ。満面の笑顔で何かいっているが、ワタシには聞こえない。違うわね。ワタシは今、すべての感覚を自分の味覚に集中している。アスパラって、こんなに青臭いものだったかしら。ニンジン——きっと自慢のニンジンなら、もっと甘みが口の中に広がるはずなのに——ただ、口の中でざらざらするだけ。トマトも口の中でグシャって潰れて、とても嫌な感じ。おかしい。どうしちゃったの？ワタシの……ワタシの味覚。

「ねえ、どしたの？ 他にも嫌いな野菜、あったんだっけ？」

「ち、違うの。わ、ワタシ、今日は……口内炎ができちゃっていて、ちょっと痛いというか……」

「えー、うそ〜、かわいそう」

ワタシは、そう、かわいそう——ミサコにとっては『かわいそう』な存在。いつも仕事で上司に怒られ、男性社員からは誰にも相手にされず、見た目もパツとしない、そういう可愛そうな存在なのね。

「だ、大丈夫だから。ミサコ、いっぱい食べてね」

夢の色を失い、現実でも感覚がおかしくなっている。そして味覚までこんなになってしまって、こんなになってまで、ワタシには生きている価値があるのかしら、楽しいことなんか何一つない。ちがう。なかったわけじゃない。それも今、奪われた。

奪われた？

誰に？

何に？

ミサコじゃない。そう、夢、どうしてワタシの夢に色がなくなったの？

お願い、返して、ワタシの夢、色つきの夢を返して！

## 第12話 色つきの現実

---

目の前に数字の塊がある。いや、塊というのは数字の美しさを知らない人の言いようで、一つ一つに意味がある。美しい数字はいい。正しい事象は美しい数字で表される。逆に歪な数字は、状態の異常さを表す。以前は美しかった数字——私が勤める会社の数字は、最近すっかり歪になり、私を幻滅させる。

「シンプルじゃないな」

最近の口癖である。会社は生き物だ。誕生から成長、そして衰退。ライフサイクルというのはおよそどんなものにもあるのかもしれない。上場という道を歩めば、社会そのものが会社の存続を後押ししてくれる。もちろんそれはそれほど潔癖なものではなく、利害の一致という条件は必須であり、それを嫌って最初から上場を目指さない者もいる。しかし、そういったことに考えが及ばず、無為に時を過ごしている者の方が、世の中には多いのかもしれない。

「バランスが悪い」

口に出しては言わないが、今の会社の経営はアンバランスだ。つまりシンプルじゃない。夢を追いかけて行くところまで行って見たものの、それを継続する方法を軽視し、いつの間にか守りの経営に変わっていく。ひとたび情勢が悪くなると守るために無理をする。無理はすぐに数字に表れる。しかし彼らには——経営にもっとも重い責任をもつ取締役たちは数字に疎い。思い通りにいかないことをすぐに景気のせいにして、やる気のない社員のせいにして、彼らが言う「やる気がない」とは、まったくもって数値化が不可能であいまいな精神論である。生産効率は従業員のやる気＝モチベーションによって上下する。そこは正しい。しかし「やる気がない社員」というのは存在しない。最初から「やる気がない人」は、本来ここにはいないはずである。「やる気を失った社員」というのはいる。そしてそれは勝手に失われたものなのか、何かが原因で奪われたものなのか。そのあたりを究明してこそ具体的な対策というものが検討できるはずである。

「プロセスを無視して結果を論ずる」

生きた数字というのは、そこにいたるまでのプロセスが正しければこそ、意味を持った数字となる。逆に言えば数字を見てもその数字が求められるプロセスがわかっていなければ、意味を理解することはできない。ことは単純な足し算と引き算の連続である。真理を求めれば、プロセスは限りなくシンプルになる。偽りの数字とはすなわち、求められて結果に向かってプロセスを複雑化し、エラーを見えなくして思ったような結果の近似値を求めることである。

「どうしてそうなるんですか？」

一人の社員が上司に噛み付く。1つの質問に対して、正しい答えがあったとして、その答えが望ましくないときに、人は複雑な道理を説いて、結果をごまかす。少しでも理屈がわかる社員であれば、ぐうの音も出ないほどにやり返されるに違いない。しかし、彼らは小賢しくもそのよう

な理屈で反論してきそうな社員には何も語らなくなる。沈黙を答えとする。

「今月の月次決算です。簡単に言うと予算とはだいぶかけ離れています。少なくとも予算の達成率を30%上げるか、或いは予算を30%下方修正して、それに見合った経営にシフトをしないと厳しい状況です」

「そうか。で、銀行との折衝はどうなっている？」

「そちらは進めておりますが、この予算で話を進めるのはいささか無理があると……」

「そうだがしかし、資金繰りは大丈夫なのか？」

「いえ。ですから厳しいと申し上げているのですが」

「じゃあ、どうするんだ」

「試算表をご覧ください、判断していただくしかないかと」

「ふむ。もっとわかりやすい帳票にならないか」

「これが前年比と前月比、そして予算の達成率がこれです。昨対割で予算達成率も80%を超える月はほとんどありません。つまり――」

「つまりなんだ？」

「よくないということです。この数字だって、売り上げこそ計上できていますが、中身は利益率が極端に悪く……」

「銀行に相談するしかないだろう」

「借入高はすでに売上とほぼ同等になりつつあります。普通は、このあたりが限界かと――」

「だが、借りてくれと言ってきているのは銀行のほうなのだろう？」

「彼らには彼らの事情があります。それに現実の数字を見せたらさすがに一つ返事で貸し出すとは思えません」

「色を着けるしかないだろう？ 結果的にその資金で立て直すことができれば――」

「嘘から出た真ですか？」

「うん？ そうだな。ともかく、そちらの話は進めてくれ。売上の予算は常務に相談しろ」

「常務の上げてくる数字は、あてにはできませんよ」

「そんなことは、言われなくとも……ああ、ともかく無担保で借りられる範囲はすべてお前に任せるから」

「社長。この際、申し上げますが、借りた金は返さなければなりません。それができなければ最終的には社長個人が責任を負うことになります。それに粉飾となれば――」

「粉飾？ 誰がそんなことを！」

「す、すいません。言葉が過ぎました。社長は色を付けろとしか、おっしゃっていませんでした」

「加減は任せる。色を着けるだけだ」

色を着ける。なんて不愉快なんだ。数字に色はいらない。白か黒でいい。ほかの色なんて必要ない。でも、それがわかるやつがここにはいない。それが現実――私のいる現実なんだ。





## 第13話 色つきの肖像

---

不快な思いをしたからと言って、それを紛らわすような適当な手段を持ち合わせていない私は、ごく当たり前のように酒に溺れた。一時はキャバクラで馬鹿騒ぎをすることで何となくストレスが発散できているような気になっていたが、私の性分なのだろう。すぐに費用対効果を考えてしまう。楽しかったはずのキャバクラ遊びも、彼女たちが自分を財布代わりにしか思っていないことがわかると、あっという間に酔いはさめてしまった。いや、もともと酔ってなんかいなかった。酔ったふりをして、なんとなく気を紛らわしていただけたのかもしれない。たぶんそうだというのが、本当に忌々しい。

### 馬鹿になれない

時々、そういうことが疎ましく思える。そういうことができる連中をうらやましく思える。しかし私はすぐに考えてしまう。こんなんでいいのか？ ほかにやるべきことがあるのではないかな？ 根本的な解決をしないで、逃げているだけではないかな？

論理的思考を捨てることは、すなわち自分自身を捨てることに等しい。しかしそんな調子だからいまだに嫁さんもらえないのだろうか？ いや、『もらう』という感覚そのものが間違っているのだろうか？ 女は奪うものなのだろうか？ しかし奪いたいと思うような女とは、いったいどこに行けば出会えるのか？ 少なくともここではない。

私はキャバクラ通いをすっぱりやめて、少し落ち着いた感じの店。カウンターバーでマスターやママと軽く話ができるような店に出入りするようになった。そしてそこで彼女とであった。

彼女がただの常連客ではないことはすぐにわかった。かつてこの店で働いていたという。その話をマスターから聞いたのは、或いはママか本人からだったのか。ともかく、断片的な彼女の情報はカウンターに座っているだけで耳に入った。彼女は「アイ」と呼ばれていた。多分「愛」なのだろうが、そのことを確認したのか、しなかったのか、すでにおぼろげである。

「北村さんって、本当、まじめよね。絶対に浮気とかしなさそう」

「それって、あんまり褒められたように思えないのは僕の勘違いかな？」

「まがったことが、嫌いでしょう？」

「それは否定しない」

「絶対そうよ。私なんかと違うわ」

「確かに、本棚の本がばらばらに並んでいると気持ち悪いとかはあるよ」

「本屋さんでマンガとか巻数順に並んでないと治しちゃう人でしょう？」

「わかる？」

「やっぱり」



もし、彼女以外にそういうことを言われれば、少しばかり腹が立つのかもしれない。いや、多分そうなのだ。自分のそういう気持ちをわかってほしいと思いながら、見透かされることを極端に嫌う性格。それが私なのだ。それは欠点ではあると思うが、修正する必要を認めない。それもまた、私の私たる部分なのだ。

「愛ちゃんはそんなことない？」

「自分のものだったら、きっと治すかな……ううん、ちがうわね。最初に本を並べるときにきちりやるし、本を戻すときもちゃんと戻すから、そういうことにならないのかな？ わかんないやあ」

その答えは私にとってどこか新鮮なものだった。無意識でコントロールできていることをいちいち気にしないというのは、なるほどそうだと思った。同時に他人のそれを許せないという感覚は、どこまでが本当なのか自分でもわからなくなった。彼女の自然な振る舞いは、私にとってどこまでも新鮮であり、魅力的なものだった。

彼女は魅力的だ。しかし同時に危険な存在でもあった。

「この前また、旦那と喧嘩しちゃって……」

彼女はこの店に家庭の愚痴を言いに来ているのである。それは気の知れた仲間との他愛のない談笑であり、本気で旦那と別れる気などない。むしろのろけと言っていい部類なのだろう。それなのに私にはどうしてもそう思えないのである。彼女の何気ないしぐさ、何気ない表情、何気ない言葉に自分勝手な妄想で色を塗り、さも彼女が私を誘っているかのように思えてしまうのである。最初のうちは悪い酒のせいだと思い、私が女慣れしていないせいだと思い込んだ。しかしそう強く思えば思うほどに、私の妄想は日増しに大きくなるのであった。

「北村さんみたいなまじめな人だったら良かったのになあ」

(ちがう。そうは言っていない)

でもそう聞こえてしまう。

「今度一緒になるなら北村さんみたいな人がいいな」

(ちがう。妄想だ。ただの思い過ごしだ)

「明日はお休み？」

彼女に見蕩れて思わず聞き逃してしまった。

「えっ？」

「あら、やだあ。聞いてなかったの？ どうしたの？ ぼうっとしちゃって」

「ごめん。ちょっと、考え事をしていて……」

「どんなこと？ いやらしいことでしょうか？」

「そんなことは……」

「えー、私ってそんなに魅力ない？」

(違う、この会話は間違っている。どうやら私は酔っているようだ)

「あ、ああ、明日は休み。休みだよ」

「え？」

「あれ？」

「どうしたの？」

「あっ。ごめん、何か聞き違えたみたい」

「大丈夫？ 北村さん、疲れているんじゃない。最近仕事忙しいの？」

「うん、まあ、いろいろと……」

「無理しちゃだめよ。何か困ったことがあったら私が相談に――」

(ちがう！ これも間違っている)

「ちょっと、酔っぱらったみたい。今日はこれで帰るよ」

「大丈夫？ 一人で帰れる？ ちょっと心配」

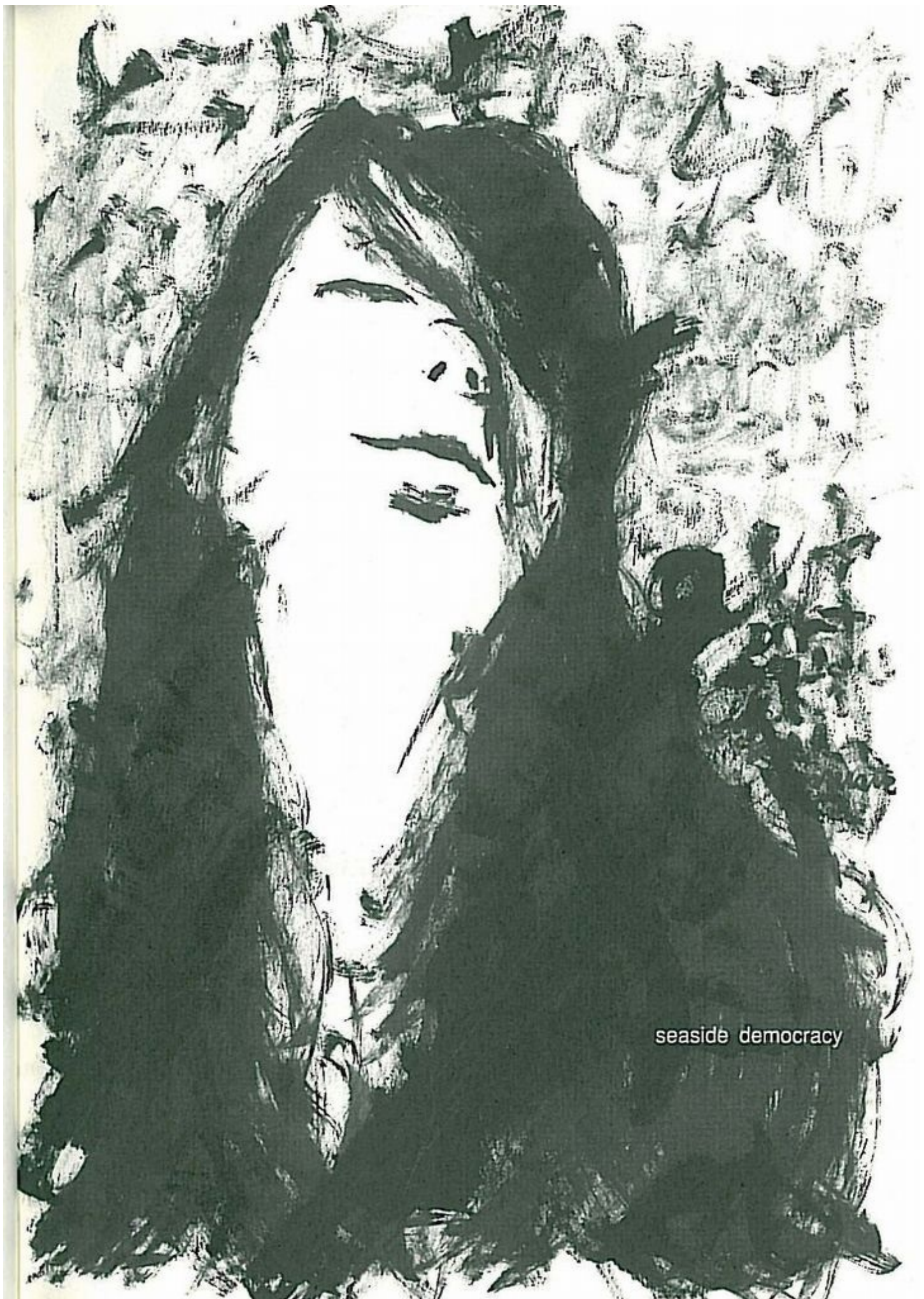
「だ、大丈夫ですよ。アパートまでは目をつぶっても帰れますから」

「私もお勘定。心配だから、近くまで送っていくね」

彼女と一緒に店を出た。そのはずだった。しかし、店の外には私しかいない。私は幻影と話を  
して、幻影と店を出たのだ。そしてここは現実。夢は冷め、天使の姿は見えなくなった。

「天使か？ 悪魔か？」

次第に私の現実、とてもとても狭くなっていった。



seaside democracy

## 第14話 緑色のカバン

---

「夢……か」

夢の中でそれが夢だと認識することがまれにある。仕事で遅くなり疲れが身体にこびりついて取れないときや、不用意に中途半端な酒量で酔ってしまったときなど、脳の機能よりも先に身体がシャットダウンしてしまうようなときに多く見られる現象だと、私は考えている。

夢の中の私はあたりを見回す。あの感覚。デジャヴィに似た感覚。知っているような初めてのようないや、この場所は知っている。この町のどこかだ。目的があって言った場所でもないし、よく通る道でもない。ただ、何度か来た事がある。その確信めいた感覚が妙にはっきりとしている。いや、夢というのはこの感覚自体がそもそも現実ではないのだ。やはり知らない場所なのか。

夢の中で私は何かを探しているようである。自分を俯瞰から眺めている。いや、それほどにはっきりと分離しているわけではない。探す……誰かを探しているようだ。暗い夜道、人通りはまばらだ。街灯はあるが、その灯りは弱弱しく、しかも街灯と街灯の間隔が離れている。どうにかして目当ての人を明かりの中に探そうとするが、なかなか見つからない。

「いったい私は誰を探しているのだ」

夢の中の私は、どうやらかなり必死になってその人を探しているようである。緑色——私は緑色の何かを探しているようだ。でもそんなもの見つかるはずがない。私の夢には色が無いのだ。いや、ないはずなのだ。確かに暗くてよくわからない。モノクロといってもコントラストによってある程度どんな色合いなのかがわかる。私にとって色は重要ではない。色以外の情報で充分事は足りる。だから夢に色はいらない。いらなかったのだ。

「私は何を焦っている？ 何をそんなに恐れている？」

一刻も早く見つけ出さなければならない。そして彼女を捕まえるのだ。

「彼女？ 女を探しているのか？ 誰を？ 何のために？」

早くしなければ、夜が明ける前にことを済まさなければならない。誰にも見られないように細心の注意が必要だ。

「私はいったい何をしようとしているんだ」

緑色のカバン。その女は緑色のカバンを持っている。それはそれは美しいエメラルドグリーン。さあ、隠れても無駄だ。もう君の逃げ場はないのだから……

「あっ！ あれは！」

見つけた！ 見つけたぞ！ ほら。いくら逃げたって無駄さ。君に逃げ場所なんてないんだ。なぜならここは——

「こ、ここは 私の夢の中 わ、私の夢の中なのに……カバンだけ緑色に光っている。色がつい



ている」

さあ、お嬢さん。遊びはここまでだ。自分の罪を悔い、私に贖罪をするのだ。ほら、もうここは行き止まりだよ。おとなしく私に従うのだ。その方が苦しまないで済むというもの……最初だけだよ。苦しいのは……知っているかい？ 首を絞められ意識が遠のいていく感覚ってというのは、存外気持ちのいいものなんだ。怖がらなくていい。怖がらなくていいから……

「こ、これは私なのか。私がやっていることなのか。いや、そんなことよりもこの人はいったい誰なんだ。肩からかけた緑色のカバンには見覚えがない。見覚えがないのに鮮明に見える。その割に緑色のカバンの持ち主の顔や服装はどれもあやふやで輪郭がぶれている。それが誰なのか判別できる情報が緑色のカバンのほかに何一つない」

私は夢の中で悦な気分を満たされていく。それは今まで味わったことがないような快楽だった。私の手に女性の細く長い首を締め上げる感覚が伝わる。それはそのまま脳のとっぺんの方から脊髄にまっすぐに快楽として伝わってくる。私は自分の顔を見ている。私の表情は苦悶と悦に浸る表情を交互に繰り返しながら、どこまでもどこまでも快楽の螺旋階段を上っていく。そしてその頂点に達したとき、私は現実の世界へと戻ってきた。

「はあ、はあ、はあ、はあ」

激しい息遣い。背中に汗が流れる。目を覚ました瞬間、私の両腕は天井に向けてまっすぐ伸びていた。まるでそこに何かがあったかのように手は丸く円を描いている。首を絞めていた。さっきまで私は誰かの首を締め上げていたのだ。夢の中で……

「な、何なんだよ。いったい！」

恐ろしいほどに感触がはっきりと両手に残っている。少しひんやりとした女性の細い首を、私は力に任せて……いや、締め上げる力を少しずつ強くしながらじわじわと絞めて行ったのだ。残酷極まりないその夢の中で、私はどうしようもない快楽の中にいた。はっきりと覚えている。

「いったい。誰だったんだ。あれは……緑色のカバン」

台所に行き、蛇口をひねる。コップに水を溢れるほどいれ、それを一気に飲み干す。もう一度コップに水を8分目入れたところで水を止める。今度はゆっくりとのどに水を流し込む。半分飲み終えたあとにコップの水を流しに捨てる。シャツを脱いで汗を拭きとり、洗濯機の中に放り込む。押入れからシャツをだし身にまとう。ひんやりと気持ちがいい。そのままベッドにもどり、気を失ったように眠りについた。

その夜はもう、夢は見なかった。



「夢じゃなかったのね」

夢から覚めても、それが現実であるのか夢の続きを見ているのか、わからなくなるときがある。18時—一定時を過ぎて何することがなければ、まっすぐ家に帰る。コンビニや弁当屋の惣菜を買って済ませることが多い。うっかりするとレンジで暖めている間に転寝（うたたね）をしてしまうことがある。もう一度暖めなおす気にもなれず、冷めたまま食べてしまうことのほうが多い。粗末な食事に比べて、食器類は色鮮やかだ。たまには凝った料理を作ることもあるけど、それは時間があればとか誰か特別な人のためにとか、そういうことはない。体が欲しがると色というものがある。ほかの人はどうかわからないけど、ワタシには確かにある—あったのだ。

「そういえば、ご飯食べたんだっけ……でも、ぜんぜん実感ないわ」

そう、今日はミサコに付き合っ、一緒にご飯を食べたんだ。アルコールも少し口にした。だけど、ぜんぜん美味しくなかった。ううん、ちがう。別に料理が不味かったとか、そんなんじゃない。味がしなかった。味はあったのだろうし、ミサコの表情からは美味しかったのだろうとはわかるけど、ワタシの舌は何も感じるができなかった。そしてそれは今でも続いているらしい。水のような無味無臭のものはまったく違和感なくのどを通るけど、甘み、苦味、塩気、うまみといった味覚はことごとく失われ手しまっているようだ。食において味覚というものがこれほど重要な要素であることに自分はまるで無自覚だった。色合い、風味、味覚。どれが欠けても食事をする楽しみは半減するとはわかるけれど、味覚が失われた状態で食物を摂取する作業がこれほどに苦痛な作業だとは思ってもよらなかった。

「きっとピーマンの罰が当たったのね」

ワタシは幼いころからピーマンが大の苦手だった。それは大人になっても変わらない。パプリカは平気だけど、ピーマンは苦手だった。別に食べるといわれて無理やりに食べられないことはない。でもピーマンのあの強烈な緑色はどことなくグロテスクでピーマンの独特の苦味とあの色合いはワタシにとって果てしなく毒々しいものなのである。そう。私の味覚は食べ物の色合いに大きく影響している。たとえば鼻をつまんで、目隠しをして何か口に入れたとき、人はそれがどんなに好きなものでも、どんなに嫌いなものでも判別することは難しいと聞いたことがある。そんな滑稽なことは試したことも試そうと思ったこともないけれど、なるほど、今のワタシはまさにそれと同じ状況にあるのだと理解をした。

「夢から色が消えて……私の中から色が消えて、そしたら味覚までダメになっちゃうのか」

理解したところで何の解決にもならない。医者に相談なんてとんでもない。医者は言うわ。『過度のストレスのせいでしょう。疲れもたまっているのでしょう。きっとそのせいであなはおかしくなったに違いない』って。

ワタシ、おかしくなんなってない！



ワタシは何度も訴えるの。ワタシちっともストレスなんて感じてないし、疲れてもいないって。でも医者はこちら言うの。

『あなたは気づいていないかもしれないけど外から見るとよくわかるのです。あなたは他の誰が見ても異常です。おかしいのです。狂っています。早く手当てをしないと恐ろしいことになります。あなたの無意識が覚醒したとき、きっと悲劇が起きるでしょう。でもあなたは何も覚えていない。まるで夢でも見ていたかのように現実の中で仮想現実と夢の間を行き来するようになるでしょう』って。

「ワタシ、狂ってなんかいない」

「どうしました？」

一瞬目の前が真っ白になり、次第に目の前の風景の輪郭がはっきりとしてきた。白い壁、白い机、白い椅子。白衣を着た男が目の前に座っている。彼の口元から白い歯が覗き込む。笑顔ではあるがどこか白々しい。もう少し回りを見渡す。ワタシは白い部屋の中にいる。白い床、白い壁、白い天井。ワタシは背もたれのない小さな椅子に腰掛けている。ワタシはといえば白い靴に白い服——それはパジャマのようでもあり、囚人服のようでもあった。証明がどこにあるのかわからないけど、すべてが白く輝いている。白く輝いて白くないものも白く見せる。目の前の医者の顔は、肌色のはずなのに、妙に白く光って見える。目の前の男が医者らしいことはすぐに理解した。しかし医者らしい男がなぜ目の前にいるのか、そしてここがどこであるのか、まるで見当がつかない。

「ワ、ワタシはたしか……」

「南里さん。南里タ子さん。どうしました？ 大丈夫ですか？」

「は、はい。ワタシは……ワタシは大丈夫です。たぶん——」

「たぶん——疲れていたのかと」

「いいえ。あなたは疲れてなんかいませんよ。南里さん。南里タ子さん」

「す、すみません。ちょっとぼうっとしちゃって、あ、あのおー、ワタシ……」

「あなたは今、どこにいて、何をしているのか、わかっていますか？ 南里さん。南里タ子さん」

医者がどうして、ワタシの名前を妙な呼び方『南里さん。南里タ子さん』と苗字とフルネームを繰り返す言うのか最初はわからなかった。そして次の瞬間、ワタシの中でもっと考えなければならぬ疑問があることに気づいた。

「せ、先生。ワタシは…・…ワタシは誰……ですか」

「やっとお気づきになりましたね。一番大事なことを。いいでしょう。今日はここまでにしましょう」

それを満足げな表情といえそうなのかもしれない。ただ白々しさが増ただけかもしれない

けど、ともかく目の前に座っている医者らしき男は白い椅子から立ち上がり、私のすぐ横をすり抜けるように歩いていった。ワタシはあつけにとられ、一瞬すべての動作が停止したあとに、男が歩き去った方向に振り返ろうとしたが、思うように行かない。そのままワタシの意識は薄れていき、目の前の風景の輪郭がなんとも怪しげに揺らいでいくのを見送りながら、次の瞬間目の前が真っ暗になり……

次に気が付いた時、それは単純な理由だったとすぐに気付いた。ワタシは目を閉じていたのである。いや、目を閉じていただけではなく、ベッドの横に座り込み、上半身を布団に覆いかぶさるように眠っていたのである。息苦しさとだらしなく垂らしてしまったよだれと不快な汗——どうしようもない自己嫌悪とともに笑うしかないという孤独に耐えて、その代償に大粒の涙を流した。声を出して泣くことができたのなら、まだどんなにましかも知れない。ワタシにはそれができなかった。

「夢の中、真っ白だった。真っ白で、目覚めたら真っ黒なんて……」

自分の体液で汚してしまった布団をベッドから剥ぎ取り、そのままその布団にくるまって、床で寝た。ベッドはまるで手術台のような気がして、なんだかとっても恐ろしくなった。

「ワタシ、病気なの……？」

数分後、ワタシは再び気を失った。

その夜はもう、夢は見なかった。



無意識のうちに私は、誰かを殺したいほど憎んでいるのかもしれない。

憎しみ――たとえば今の仕事はどうだろう。私は私の仕事をきっちりとこなしてきたし、これからもそうするつもりだ。しかし、私がいくらそうしたいと思ったところで、組織のうねりに逆らうことなどできない。白を黒だというのであれば、それに従わなければならない。そのストレスが、私を苦しめているのか。

苦しい？

いや、苦しいというのであれば、必ずしも仕事に限らない。憎しみに相反する感情。すなわち愛情もまた、それが受け入れられないのだとしたら、憎しみと同じ作用を引き起こす。愛しいと思えば思うほど、募る思いはやがて凶器に変わることがある。自分の思うようにならないときには、相手を殺してしまうことで、自らの思いを成就させるのだという狂信は、それこそ人の営みとしてなんら変哲もない些細な出来事である。

私の身に起きた変化が、夢に現れる。ストレスに対する生理的な作用として、私の夢はかくも異常な――夢に色がついていることは、30年以上生きてきた私にとって、それは、それは異常な事態なのである――状況に陥っていると考えれば、すべて納得がいく。しかし納得ができないこともある。

「あのリアルな感覚は、いささか度が過ぎているとしか思えない。もしかして私は、自分で気づかないうちに凶暴な野獣を心の内に飼ってしまったのではないか？ 人を――女の人を襲う夢など、今まで見た記憶がない」

人を襲う夢を最初に見たのは、おそらく2週間ほど前だ。いや、或いは一週間前かも知れない。正確なことは何も覚えていない。ほんの断片だけ――女性の所持品、道端に咲いている名も知らぬ花、明滅するライト。それぞれの色だけははっきりと覚えている。今まで夢を見た後にそこに現れたものが何色かだなんて覚えていたためしがない。そもそもモノクロなのだ。夢の中に信号が現れれば、今赤なのか、青なのかそれはわかる。しかし色を見て判断しているのではない。綿々いい状態かそうでないのか、情報として理解できるだけであって、『赤色が見えたから立ち止まる。青に変わったから歩き始める』ということではないのだ。

「へえ、そうなんだ。ワタシ、白黒の夢なんてめったに見ることないから全然わからないわ」

酒の席でうっかりママに話したことがある。

「北村さん、最近顔色よくないわよ。ちゃんと眠れている？」

「実は、あまりよく眠れてないんだ。いや、睡眠時間は取れているんだけど、変な夢ばかり見て――」

「夢占って知ってる？」

「あー、フロイトとかユングとかの？」

「うーん。確かそんな人だったっけ？ 難しいことはよくわかんないけど、たとえば何かに追われて逃げる夢を見る人は、今抱えている問題から逃げ出したいだとか、過去の過ちをずっと引きずっているとか……ワタシはよくそういう夢を見るわ」

「じゃあ、何かを追いかける夢は？」

「えー、なんだろう。ワタシ自分のことしか調べてないから覚えてないわ。でもそうね……追いかけるってことは、欲求不満ってことかしらね？ あら、北村さん、何かストレスとか溜まっていることあるんじゃないの。ほらほら、飲んで。楽しくやりましょう」

思わず『人を殺す夢は？』と聞きそうになったが、カウンターの隣の客が話に割り込んできたので言いそびれてしまった。

「夢占いとか好きだよねー。女の方は。俺は占いなんかちっとも気にならないけどなあ。ねえ？ そうでしょう？」

愛想よく話しかけてくるその男は、すっかり酔いが回っている様子だったので、私は適当に話を合わせて男の話を受け流した。この店ではよく見かける男だ。酔っていないときはつまらない男だし、酔えば酔ったで面倒な男だ。私は正直、この男が苦手だった。ママはそのことを察して男の相手をしてくれる。今日は愛ちゃんの姿が見えない。そのことを一番聞きたかったのだが、どうにもママに話すきっかけを失ってしまった。無為な時間が過ぎる。そして酒も過ぎた。

いつもよりも少し酔いが回っている。12時前に店を出た。外はべたつくような生暖かい風が吹いている。不意に悪寒を感じ、いやな汗をかき始める。家までは歩いて10分少々ある。不意に軽い眩暈を感じ目に入った電信柱までふらふらと歩いていき右手を掛けて、路面を見下ろす格好になる。急に内臓があわただしく動き始める。まったく制御ができない。

「おいおい。たいして飲んでないじゃないか。まさかこんなところで……ううっ」

心拍数が上がっていく。吸い込む空気にまるでアルコールが溶け込んでいるかのように呼吸をするたびに気分が悪くなる。我慢して我慢できないことはない。しかし、まるで自分の体を制御する自信がなかった。一刻も早く家に、自分の部屋に帰らなくては――それからどうやって家に帰り、ベッドに横たわったのかまるで覚えていない。朝目覚めたとき、上着とズボンを床に脱ぎ捨て、ネクタイとワイシャツはベッドの上に脱ぎ捨ててあった。またひどく恐ろしい夢を見た感覚が私の体に残っている。

「嫌な感じだ。吐きそうだ……」

ともかく洗面所まで体のあちこちを壁や家具にぶつけながらようやくたどり着いた時、私は私



自身に起きている異常に気が付いた。右の頬にひっかき傷のようなものがある。いや、首筋や左のおでこ――髪の毛の生え際も何かにぶつけたような跡が残っている。

「いったい何をやらかしたんだ……私は」

次の瞬間、私の脳裏に何かの映像がフラッシュバックした。

「女――なのか？ 痛っ！」

脳裏に浮かんだ映像と結びつく体の痛みが、記憶の奥底に刻まれているようである。私は――私の体はその痛みを思い出さないように、記憶の時系列をバラバラにしているようだった。断片的な記憶にノイズが混ざり、ストーリー立てて思い出すことができない。ともかく顔を洗おう。そして――

そしてもう一度ゆっくり休もう。今日は休みだ。ともかく眠ろう。私はもうろうとする意識をそのまま放置し、身体に刻まれた、いわば帰巢本能のようなものを頼りに再びベッドに戻った。

これが本当の悪夢の始まりであった。



「これってやっぱり病気なのかしら」

ワタシは、ここ数日の夢の変化、そして一時的に味覚を失ったことについていろいろと調べていた。味覚障害がストレスによって引き起こされる可能性について書かれているウェブサイトは山ほどある。実際に味覚障害に苦しんだ人のブログなどはすぐに見つかった。いずれにしても医者に行った方がいいのだろう。あの白い部屋の夢も、それが原因に違いない。なぜならワタシには病院に行きたくないというはっきりとした感情を自分の中に確認することができていた。仕事のストレスが原因で病気になったなどと、認めたくないという気持ちがあるのは事実である。そしてそれではいけないという気持ち――無意識があのような夢を見させたのだと思う。

「でも、そもそもおかしくなったのは夢からよね」

いつの日からか自分の見る夢に色がなくなってしまっている。これも仕事によるストレスが原因といってしまうえば、簡単なことだが、ワタシにはどうしても納得がいかない部分があった。でも、それがどうしてもわからない。いくら考えてもこれという答えは見つかりそうになかった。おそらくそれがわからない限り、医者に行っても無駄なのではないだろうか？

「夢の共通点から、何かがわからないかしら」

改めてここ最近見た夢について思い浮かべてみた。しかし、断片的にしか思い出すことができない。ほんの数分であきらめてしまった。

「ダメね。全然思い出せないわ。色が無いということ、昨日の夢も白と黒しかなかった。登場人物の人相がはっきりしないというのも共通点かも知れないわね。それに――」

一瞬背筋がゾクとするのを感じ、思わず肩をすくめてしまった。

「何かに追われる夢――あれはワタシを追いかけて、そして襲ってきた。襲う？ 違うわね。あれは――殺そうとしていた」

思考の停止。どうしてもそれ以上考えを進めることはできなかった。嫌なことに向き合うためには、気持ちの整理や、それ以上に体力が必要なのに、今の自分ではとても対処できそうになかった。

「休みがほしい……」

論理的な結論というよりは、何気ない発想だった。事実、そう呟いてから、そのことに気が付くまでかなりの時間がかかったように思える。

「そうよ！ 休めばいいんだわ」

仕事を初めてから、風邪をこじらせたとき以外にほとんど休んだことはなかった。有給休暇を取って、どこかに行こうとか、そういう発想はまるでなかった。これがもし、実家が本州を離れていたりするのであれば、休暇を取って実家で羽を伸ばすということもあったかもしれない。

しかし、私の実家は電車で1時間ちょっとで行くことができる。

カレンダーを眺める。今の自分の仕事のスケジュールを思い浮かべる。別にどこで休みを取っても問題はなさそうだ。それが逆にむなしい。そして休んだとして、どうやって過ごしているのかが分からない。家でゴロゴロしていても、よくない考えが頭の中を駆け廻り、悪い夢を見るだけのような気がした。何をするかを考えなければならない。

「悪い夢……悪夢……夢……夢かぁ」

はたしてそれがいい考えなのか悪い考えなのか、思いついた瞬間はいい考えのように思えたのだが、冷静にそれを実行することを考えると、現実性の乏しさに思わず笑えてしまった。

「夢で見た場所を探してみようかな」

こうして私は、翌日、総務部に休暇届を提出した。木曜、金曜と休みを取り、土日合わせて4日間連続で休めるようにした。休暇の理由は、『家庭の事情』とだけ書いた。何か聞かれたら、親戚の結婚式とか適当な理由をつけようと思ったが、何も聞かれなかった。安心したような、がっかりしたような、妙な感覚を再び味わった。水曜日までにやらなければならない仕事をきっちりこなし、家路についた。不思議なことに、ここ数日例の悪夢はまったく見なかった。もしもこのままあの妙な悪夢を観ないのだとしたら、なんのために休みを取ったのかわからないと思いつつも、ベッドに横たわり、眠りについた。

私の期待はいい形で……いいえ、悪い形で？ ともかく裏切られた。その夜、私は望みどおりに悪夢を見ることになった。

これこそが、本当の悪夢の始まりだった。

[BGM3:seaside early days #1 / art kill music\(youei kawazu\)](#)

オレンジ、紫、赤、黄色。色とりどりのネオンが怪しく街を照らしている。  
ピンク、緑、青。派手に着飾った娼婦たちが色目使いでこちらを見ている。  
茶色で薄汚れた野良犬がゴミ箱の残飯をあさっている。  
空を見上げると果てしない闇が広がっている。  
星も、月も見えない。

聞きたくもない音楽が心を煩わせる。でも、それがどんなメロディで、どんなリズムなのかまるでわからない。

色鮮やかに見える風景はどこかでたらめで、憂鬱さを秘めている。いや、むしろもっと攻撃的でさえある。

私の存在を拒むかのようにはかなげだ。

なぜだ？ なぜ私の顔をみて笑う。

通り過ぎる女たちは、皆私をみて笑っている。真っ赤な口紅がいやらしく、さげすむように吊り上り、目はさげすむように垂れ下がっている。腫れぼったい瞼は、金や銀、ピンクや紫が入り混じったような複雑な模様をしている。

気持ちが悪い。

吐きそうだ。

通り過ぎる男たちは黒いスーツに身をまとい、下向き加減で足早に走り去っていく。  
皆、私をさけるように遠ざかっていく。

目と目を合わさないよう、そして決して口は開かない。靴音だけが頭に響く。

私は狂ってしまったのだろうか？

いや、この世界が狂っている。

そう、なぜならこの世界は夢の世界。夢の中。私の夢。私の――

「あなたには治療が必要です」

最初、老人が目の前に立っているのかと思った。なぜなら突然現れたその男の髪は、真っ白であった。髪の毛だけではない。全身が白である。白衣に身をまとい、にこやかに笑っている。その顔は若々しく、とても老人にはみえない。ただ、妙に声だけはくぐもって聞こえた。

「あなたには治療が必要なんです。北村さん。北村誠二さん」

同じことを繰り返すのはこの男の口癖なのだろうか？

「北村さん。あなたは今、世界が狂ってしまったと思っていますか？ それともあなたがどうかしてしまったのではないかと疑っていませんか？ ご自分のことを」

どうにも話し方が気に入らなかった。一度言えば済むことを二度いう。言っていなくてもそう聞こえる。

「どうでしょう？ 私は夢の中にいるのだから、どんなことが起きてもおかしくないと思っています。そう思う自分ですら夢の中の自分なのですから、問いも答えも意味はないと思いますが」

白衣の男はにやりと笑った。口元から白い歯が見える。目を見開き白目がより大きく見えた。「そうです！ そうですとも！ この世界は狂ってもいないし、あなたもおかしくはなっていない。しかし、夢は、ただ夢というわけでもないのです。夢には意味がある。このような夢を見るからには、それ相応の理由があるのです。ご存知でしたか？ ご存知でしょうね。きっとあなたなら、わかっていらっしゃる」

どうしようもない嫌悪を感じ、何か罵声を浴びせようとしたとき、めまいに襲われた一瞬目の前の風景がぐらりと揺れて元に戻る。私は少しだけよろけたが、次の瞬間、何事もなかったかのように平静を取り戻した。

おかしい。私は今、この男に罵声を浴びせようとした。だが、浴びせようとした動機をいつの間にか見失ってしまっている。消失したのか、吸い込まれたのか、奪い取られたのか。ともかくこの男に対する嫌悪感は消え失せ、私は戸惑うしかなかった。

「いけません。一時の感情に惑わされては、せっかくの治療も無駄になってしまいます」

「無駄？ 治療？ なんのことだ。私は病気なんかに一」

そこで私は何か大事なことに気が付いた。それが何かははっきりとはわからないが、気が付いたということは実感がある。

「そうです。夢には意味があるのです。よく覚えておいてください。また、お会いしましょう。  
あなたには、治療が必要です」

真っ暗だ。いや、薄明り。豆電球。

私は目を覚ました。目覚めたという実感はないが、目が覚めたのはおそらく事実だ。なぜなら  
ここは私の部屋で、私のベッドの上だ。状況から見て、私は眠り、夢を見て、そして目覚めた。

「病気……なのか？」

私は翌朝、会社に連絡をし、風邪を引いたので病院に行く伝えた。

「こういうときって、どうしたらいいのかしら」

ゆっくりとした朝。いつもなら化粧をすませてとっくに家をでる時間だ。トイレも、洗面も、着替えも、食事もいつもより少し多めに時間をかけた。それでもいつもより1時間も変わらないうちに身支度ができてしまった。

木曜日――南里夕子は、今日から2日間、会社に休暇届を出していた。土日合わせて4連休になる。ここ数日自分の身に起きている体調不良を改善すべく、まずは病院に行こうと決意したのであるが、実はすっかり気が引けてしまっていた。

「まず、何から話したらいいのか……、夢のこと、いえ、それよりも症状よね。味覚がおかしくなって、でも今朝はなんともないわ。やっぱり、症状とそのときの状況を伝えないとダメね。ミサコに食事に誘われて、最初に自覚したのはその時。そのあとは……」

どうにも頭の中の整理ができない。起きたことを時系列に並べていきさえすればいいと思ったのだが、ところどころの記憶があいまいで、現実感に乏しい部分がある。そしてその前後に挟まって、味覚障害や精神の不安定さがあるはずなのだが、思い起こそうとする記憶に色や感触といった実感が少なく、逆に怖れや不安といった嫌な感覚だけが妙にはっきりしている。それを言語化することができない。

「自分一人で考えていてもダメね。だからこそ病院に行ききちんと診察してもらって、それで――」

それではたして、本当によくなるのであろうか？ 風邪や怪我で病院に行くのとはわけが違う。

「ここであれこれ考えていても仕方がないわね。とりあえず外に出て、そうね。とりあえず東西総合病院にいけばなんとかなるかな」

東西総合病院――南里夕子の住む町で一番近くにある総合病院である。病院のことはネットで調べてあった。診療はともかく、相談窓口は3時まで受付している。今から部屋を出れば11時には病院につく。

「行って、嫌だったら、無理に受診することないし、街に出てパーッと買い物でもすれば、気分も晴れて、案外それで、よくなるかもしれないわね」

自分は後ろ向きな人間だ。それはわかっている。もう20年以上、自分自身と付き合っている



。だから後ろ向きな自分のごまかし方は、ワタシが一番よく知っている。

嫌がる自分を無理やりに玄関から追い出して、ワタシは外に出た。「バターン！」と大きな音を立てて閉じたドアにカギをかける。「ガチャッ」と無機質で冷たい音が、ワタシの心を揺さぶる。

「忘れ物……ないわよね」

何かの理由をつけて、部屋に戻ろうとするワタシは、キーをドアノブに差したまま立ちすくむ。

「ガガガガ」

鍵穴とキーのギザギザがすれ合う音。キーには小さな万華鏡のキーホルダーがついている。指先ほどの大きさのそれは、のぞけばちゃんと万華鏡になっている。子供のころから万華鏡が好きだった。そういえばしばらくこの万華鏡の中を覗いていない。そのままキーをカバンにしまうのか、万華鏡の中を覗くのか迷ったが、結局そのままカバンに入れて歩き出した。

不安な気持ちを抑えられない。

もしも、中を覗いて、その中に何もなかったら……

「コツ、コツ、コツ、コツ……」

南里夕子の足取りは、いつになく重たかった。

「さて、どうしたものか……」

ベッドに横たわり携帯電話を眺める。会社に風邪で休むと連絡をしたものの、実際には風邪ではない。体調が悪いのは本当だが、どことなくうしろめたさがあった。そして休んでしまった自分が情けなくもあった。

「病院って言うてもなあ……そういえば、診察券、財布の中に入れていたっけ」

デスクの上に置いてある財布を手にし、カード入れの中からかかりつけの病院の診察券を取り出した。

「しかし、風邪というわけではないし、内科の先生に診てもらってもしかたないか」

診察券を財布にしまい、ベッドの上に放り投げ、自分の身体もベッドに投げだした。無性に自分の身体をいじめたくなり、ベッドに横たわったまま両膝を両手のひらでパンパンと叩いた。腿がジンジンをし、身体がじんわりと熱を帯びてくる。次に自分の顔を同じように手のひらでパンパンと叩く。少しずつ気分がすっきりとしてきた。

「精神科なんて縁がないしなあ。この近くの総合病院といえは……」

再び携帯電話を手にし、ブラウザーで検索を始めた。

「東西総合病院かあ……。今から支度すれば間に合うか」

会社に行くのと同じシャツとスーツを着たが、ネクタイは締めない。洗面所で身なりを整え、戸締りを確認してから部屋を出る。

グラッ

外に出た瞬間、激しいめまいに襲われる。

「どうということはない。最近はこのものだ」

いつからか、玄関を出た後、めまいをおこすようになっていた。しかし、それはすぐに収まる。疲れ、ストレス、睡眠不足。めまいの原因になるようなものは、いくらでもあげられる。

医者にはストレスは治せない。

しかし、ストレスが原因になっている症状を抑えたり、緩和したりすることはできるだろう。それにストレスの解消方法や、睡眠のとり方などを聞いてみるだけでも、損はない。それに――

「夢のことを、少し聞いてみたいしなあ」

家を出て、駅に着くまでの間、あれこれと考える。自分の症状について、何から話したらいいのか、何を話せばいいのか。まるで見当がつかなかった。不安というよりは、みじめさが自分を責めた。そして何となくだが、その感じ方が、そもそものストレスの原因、この病の原因であろうと考え付いた時、駅の改札まで来ていた。

「他人のせいにできていたら、たとえば、誰かを恨むことができていたら、こんなことにはならなかったのかもしれないなあ」

しかし、それは性分である。それが病の原因、ストレスをため込む原因だとしても、今さら自分を変えることなどできない。そして、別の感情が湧き上がってくる。

「変えるのは私の方じゃない。私の方じゃないはずだ」

思わずその言葉を人に聞かれるほどの声の大きさを口にしてしまったときに駅のホームに電車が入ってきた。

「ちいっ！ しまった。私としたことが.....会社に行く方と反対側のホームから乗らないといけないのに」

慌てて反対方向のホームに移動するとちょうどそこに電車が入ってきた。息を切らしながらその電車に飛び乗ると再び例のめまいが襲ってきた。思わず倒れそうになり、ギリギリのところ得手すりにつかまり持ちこたえる。

「畜生、ますますひどくなっているなあ」

空いている座席を探し、腰を下ろす。病院の最寄り駅まで20分ほどだ。急に睡魔が襲ってくる。もはや抗うことはできなかった。

北村は再び夢の世界に足を踏み入れた。

## 第21話 耳鳴り

---

マンションを出て、駅に向かって歩く。通勤時間よりも少し遅いだけで、街の風景はがらりと変わる。路地によっては人や車の気配が全くない。街の雑踏は遠くに聞こえるものの、どこか現実感がないように思えた。

「ふだんあるかない時間帯だと、こんなに違うのね」

最初は物珍しく感じていたのだが、次第に不気味に思うようになってきた。

「こんなにも人影がないものかしらねえ」

車一台が通れるほどの十字路の真ん中に立ちどまり、前後左右を眺めてみる。どこにも人の姿がないし、車もオートバイも自転車もない。それでも遠くの方で車のエンジンらしき音や、クラクション。そして人の声が幾多にも重なり、意味を消失してしまった音かかすかに聞こえる。

聞こえるような気がした。

塀の向こう側、そして壁の向こう側には、確かに人の気配があるのだ。

掃除機の音

テレビの音

布団を叩く音

生活の音は確かに聞こえるのに、姿は見えない。それが当たり前の風景だったとしても、どうにも不安でならない。

「何をそんなに不安がらなければならないというの」

そう呟いてみたものの、南里夕子には不安の正体がはっきりとわかっていた。目に見える風景、耳に聞こえる音、肌で感じる気配。これらからこの世界が現実であるとワタシは、信じたいのだ。信じたいが、もしかしたらこれが夢かもしれないという不安が南里の精神をむしばんでいく。

「やっぱり……、ワタシ、病気なのかも……ね」

目の前の風景が揺らぎ始める。いや、正確には今来た道と正面と右手。左方向以外は現実感がなくなってしまうている。左は駅の方角。

「これからワタシが向かおうとしている方向……そっち以外は現実感を喪失するって暗示かしらね」

南里夕子は、頭を左右に激しく振り、もう一度正面、右手、後ろを振り返る。  
「大丈夫。大丈夫なんだから」  
そこにはなんら変わりのない日常の風景があった。

チリン、チリン

背後から何かが迫る気配がする。自転車がすぐ横を通り抜ける。頭にサンバイザーを被った中年の女性が、自転車の後ろに小さな女の子を乗せて通り過ぎていく。小さい女の子はこっちを振り向き、不思議そうな顔でこちらを眺めたが、すぐに前に向き直った。

正面から軽トラックがやってくる。先ほどの自転車が、道路のわきに身を寄せてその車をやり過ごす。

チリン、チリン

自転車が先の交差点を右に曲がっていった

チリン、チリン

チリン、チリン

自転車のベルがずっと耳の中に残っている。

いてもたってもいられなくなって、南里夕子は駆け出した。はやくこの場所から離れたい。しかしどんなにその場所を離れても、ベルの音は鳴りやまない。

チリン、チリン

チリン、チリン

音はどんどん遠くなる。遠くなるが、やむことはない。息を切らしながらようやく駅に着いた。その瞬間、ベルの音は聞こえなくなった。改札を通り抜け、会社に向かうのとは反対の方向のホームに向かう。階段を駆け上がると目の前に列車が止まっていた。ドアが開く。何の躊躇もなくそのまま列車に飛び乗る。開いているシートに身を投げ出すように座り、南里夕子は気を失った。



Everything



Life  
Life  
Life  
Life  
Life  
Life  
Life  
Life  
Life  
Life





## 夢追い人～AnotherDream AnotherSummer

<http://p.booklog.jp/book/27654>

著者：めけめけ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mequemeque/profile>

発行所：ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/27654>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/27654>